

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：13601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2014

課題番号：25580076

研究課題名(和文)『杜騙新書』の基礎的研究

研究課題名(英文)Basic research on "'Dupian xinshu'"

研究代表者

伊藤 加奈子 (ITO, Kanako)

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

研究者番号：80293489

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：『杜騙新書』は中国の明朝末期に出版された、様々な詐欺事件を題材とする短編小説集であり、中国近世の庶民生活、商人の経済活動、当時に生きた人々の善悪判断といった物の考え方を具体的に生き生きと伝える書物である。

日本に現存する『杜騙新書』の明刊本や江戸時代の和刻本の所蔵先を調査・資料収集を行い、書誌学的事項を調査し、訳注を作成した。平成27年3月21日『『杜騙新書』訳注稿初編』を出版、全国の主だった図書館並びに東洋学関係出版社等に寄贈した。

現代日本語訳注の作成によって、我々はこの書物がより広く人々の目に触れ、中国文化について更なる新しい理解を広めることを期待するものである。

研究成果の概要(英文)：“Dupian xinshu” is a book of Chinese short stories written about many cases of swindling in the late Ming dynasty. This book has valuable informations that will help us understand the real life during the Chinese early modern period, the economic activities of Chinese merchants, common sensibilities at that time.

We collected the informations of the Ming dynasty published and the Edo period published “Dupian xinshu” remained in Japan, investigated bibliographical datas, and created a Japanese translation from the Edo period published “Dupian xinshu”. March 21, 2015, we published “‘Dupian xinshu’ Japanese translation and commentary (first volume)”, and donated the book to major public libraries and publishers of East Asian Studies in Japan. We hope that more people will deepen the understanding of Chinese culture through this book.

研究分野：中国語学

キーワード：中国古典文学 東洋法制史 中国語学 中国経済史

1. 研究開始当初の背景

当科研究プロジェクトでは、明朝末期に出版された俗語短編小説集『杜騙新書』を取り上げ、基礎的研究を行った。

江戸時代に和刻本として日本でも出版されている当書については、石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』や徳田武「馬琴と『杜騙新書』」など、江戸文学研究の視点から滝沢馬琴等の作品に見られる日本文学に対する影響を論ずる先行研究が複数存在している。

しかし、日本における中国近世文学研究では従来これを専門的に取り上げ調査したものがない。鶴見尚弘「『杜騙新書』とその和刻本」や足立啓二「明末の流通構造：『杜騙新書』の世界」のような東洋経済史の観点からによるアプローチは存在するが、読者を一般庶民（その多くは商人層）に設定し、彼らにとって読みやすい俗語で記された詐欺窃盗への警告・防衛対策指南の実用書という性格もあってか、『杜騙新書』はこれまで本格的な中国文学の研究対象としてあまり顧みられてこなかったという背景がある。

2. 研究の目的

中国近世文学研究界においていわば不遇の扱いを受けていた『杜騙新書』であるが、それが内包している情報は実に豊かなものがある。

明代に生きていた一般庶民の生活、商人たちの経済活動、当時の司法裁判に見出される制度のあり方と善悪に対する物の考え方、一般庶民が用いていた近世中国語の俗語表現等々、もちろん調査研究にあたって書かれている内容に幾分フィクションが含まれている可能性について考慮を払わなければならないのは当然であるが、それを差し引いても『杜騙新書』は中国明代後期の様々な側面をリアルに描写している興味深い資料であると評価できるであろう。

これまで掘り起こされる機会を得なかったその興味深い点を様々な角度から明らかにし、より多くの人々の目に留まるべく基礎的情報を整理するのが本研究の主たる目的である。

3. 研究の方法

日本に現存する『杜騙新書』の明刊本や写本や江戸時代の和刻本等々といった諸本の所蔵先（国会図書館、(財)前田育徳会尊経閣文庫、東京大学東洋文化研究所、東京大学総合図書館、国立公文書館内閣文庫、等々）を調査した。複写の許可が得られたものについては散逸しないよう製本作業を進め、諸本資料の充実を努めた。

また『杜騙新書』は中国近世における商人の経済活動や司法裁判にも深く関わっている側面があるため、『銀水総論』『新鑄銀経発秘』『鹿州公案』といった、当時の金融・司法に関する書籍も複写などで取り寄せられ

るものは入手し関連資料の充実を図った。

それらから『杜騙新書』の書誌学的情報を精査し、江戸時代の和刻本にも取り上げられた箇所について全文テキスト化し、現代日本語訳注と解説を作成した。

4. 研究成果

『杜騙新書』の明刊本は全四巻・全 84 話であり、それらは全二十四類に分けられる。

巻一：

1～8 話（一類〈脱剥騙〉）

9 話（二類〈丟包騙〉）

10～11 話（三類〈換銀騙〉）

12～15 話（四類〈詐哄騙〉）

16～19 話（五類〈偽交騙〉）

20～21 話（六類〈牙行騙〉）

22～24 話（七類〈引賭騙〉）

巻二：

25～26 話（八類〈露罪騙〉）

27～30 話（九類〈謀財騙〉）

31～33 話（十類〈盜劫騙〉）

34～37 話（十一類〈強搶騙〉）

38～43 話（十二類〈在船騙〉）

44～45 話（十三類〈詩詞騙〉）

46～47 話（十四類〈仮銀騙〉）

巻三：

48～50 話（十五類〈衙役騙〉）

51～54 話（十六類〈婚娶騙〉）

55～59 話（十七類〈姦情騙〉）

60～64 話（十八類〈婦人騙〉）

65～66 話（十九類〈拐帶騙〉）

巻四

67～72 話（二十類〈買学騙〉）

73～77 話（二十類〈僧道騙〉）

78～80 話（二十類〈煉丹騙〉）

81～83 話（二十類〈法術騙〉）

84 話（二十類〈引嫖騙〉）

日本に現存する諸本の調査結果、諸テキストの間で異同は殆ど無いようである。たとえば国立公文書館内閣文庫所蔵の抄本（林羅山手沢本）と明刊本との主な違いは、封面（＝おもて表紙）を写したと思われる巻頭半葉が内閣文庫蔵抄本では“居仁堂余献可梓”と記していること（明刊本は“存仁堂陳懷軒梓”）、熊振驥によって万曆丁巳の年（1617）に書かれた序「叙『江湖奇聞杜騙新書』」を内閣文庫蔵抄本は有しているが明刊本には見られないこと、また内閣文庫蔵抄本の本文巻一 1b 第 3 行に“書林漢沖張懷耿梓”と記していること（明刊本は“漢沖張懷耿”が空格）この三点であり、それ以外のテキストに違いは見られないことが確認された。なお国会図書館蔵抄本については、封面や序なしで、“漢沖張懷耿”が空格という、内閣文庫蔵抄本とはまた異なる特徴を示している。

日本に現存する『杜騙新書』諸本の先行研究には牛建強（2000）があり、東文研蔵明刊本と内閣文庫蔵抄本を研究しているが、これに補足すると、内閣文庫蔵抄本の巻一第 17

葉・第 42 葉と巻二第 9 葉・第 22 葉は白紙になっている。鶴見尚弘(1978)は、前田育徳会尊経閣文庫蔵明刊本には熊振驥による万曆丁巳の序があると指摘している。しかし京都大学附属図書館蔵明刊残本(巻一・巻二のみ)にこの序は無い。また筑波大学附属図書館が抄本を巻二のみ所蔵しているが、その巻二 16a を見ると、明刊本 22a~b に相当する 360 字相当部分が、漏れに気付かぬまま書き写されていることが分かる。

現在の中国における排印本(活字出版された書籍)には、孟昭連が整理した 江湖奇聞杜騙新書(百花文艺出版社、1992 年)や、張吉霞が現代中国語訳を付した 江湖奇聞杜騙新書(山西古籍出版社、2003 年)などがあるが、本格的な校注本はまだ無いようである。

和刻本『杜騙新書』は、明刊本の四巻(全 84 話)から 17 話を選定して、訓点を付したものである。タイトルと順序は以下の通り、丸カッコで添えたのは明刊本の巻数・話数・分類情報である。

- 1 偽粧道士騙塩使(巻二 44 話・十三類)
- 2 陳全遺計嫖名妓(巻二 45 話・十三類)
- 3 膏葉貼眼搶元宝(巻二 35 話・十一類)
- 4 道士船中換轉金(巻一 11 話・三類)
- 5 詐無常燒牒捕人(巻一 13 話・四類)
- 6 詐称偷脱青布(巻一 6 話・一類)
- 7 先寄銀而後拐逃(巻一 2 話・一類)
- 8 仮馬脱緞(巻一 1 話・一類)
- 9 明騙販猪(巻一 3 話・一類)
- 10 詐匠修換錢卓厨(巻一 8 話・一類)
- 11 詐学道書報好夢(巻一 12 話・四類)
- 12 詐以帚柄要驕夫(巻一 14 話・四類)
- 13 装公子套妓脱賭(巻一 23 話・七類)
- 14 盜商夥財反喪才(巻二 27 話・九類)
- 15 公子租家寡婦(巻二 31 話・十類)
- 16 帶鏡船中引謀害(巻二 41 話・十二類)
- 17 脚夫挑走起船貨(巻二 43 話・十二類)

全四巻の明刊本のうち、和刻本に採択された話は、前半部分である巻一と巻二、一・三・四・七・九~十三類からのみである。これは鶴見論文が指摘した“婦女にかかわる騙偽を中心とした三巻や、中国的な事例を中心とした四巻について全く収められていない”とも一致している。

『杜騙新書』については、時に公案小説(= 中国の近代社会における裁判を題材とする小説、勸善懲悪の物語)と関連づけてとりあげられることがある。例えば大塚秀高『増補中国通俗小説書目』(1987)は以下のように述べている(下線は伊藤が付した)。

~ 引用開始

万曆年間に文言の「公案」小説集が多数刊行された。その変種に張応愈の『杜騙新書』四巻がある。騙りを杜〔た〕つことを標榜するが、実体は犯罪の百科全書の観を呈する。

脱剥騙、丟包騙をはじめとする二十四騙に合計八十三の犯罪譚を収める『杜騙新書』は、中国史上類を見ない作品である。「公案」小説は犯人が名裁判官の「推理」により必ず逮捕される。ところが『杜騙新書』は犯人があつぱれ逃げおおせ、事件が必ず解決を見ずに終わる作品のみからなっている。この開いた形式は『十二笑』・『照世盃』をへてのちの『儒林外史』につながるが、ここに新しいタイプの小説が誕生したといえよう。『杜騙新書』は日本文学への影響という面からも見逃せない作品である。それは明和年間にその十七篇を選んだ和刻本が刊行され、馬琴の『八犬伝』などにその騙術譚が利用されていることから容易に理解される。

引用終了~

『杜騙新書』による馬琴といった江戸文学への影響は確かに大塚が記すその通りであるが、「『杜騙新書』は犯人があつぱれ逃げおおせ、事件が必ず解決を見ずに終わる作品のみからなっている」という大塚評価については些か疑義がある。今回の基礎調査では和刻本に選定された 17 話を主な対象としたが、その範囲だけに限ってみても「犯人があつぱれ逃げおおせ」ることが成功しているわけでは決してないのである。

たとえば第 14 話「盜商夥財反喪才」では、零細旅商人の劉興が同郷の大商人張沛と旅を共にすることで親しくなったが、つい出来心で張沛の五百両ほどの金を持ち逃げしてしまい、張沛と地元の仲買業者陳四によって捕えられてしまい、持ち逃げした金だけでなく劉興がそれまで積み立てた七十両ほどの貯金まで没収されてしまう。第 16 話「帶鏡船中引謀害」では、力自慢で頭は少し弱い御曹司の熊鎬が老練な下僕の満起を伴い、旅商売をしつつ地方漫遊するが元手の金も少なくなったことで帰京と相成り、土産として買い込んだ筆墨と鏡を入れた荷の重さから船頭が彼らを殺害して金品を奪い取ろうと画策するが、賢い満起によってその企みは未然に防がれ、悪い船頭に土産品の鏡二枚を送り懐柔し、主従二人は無事に故郷に戻ってめでたしめでたしという内容である。第 17 話「脚夫挑走起船貨」では、田という郷試の受験生が船から下りて自分の荷物を人夫に運ばせたがそれを持ち逃げされてしまい、田から訴えを受けた呂という巡捕(= 捜査指揮・判決を担う官)が囹捜査で犯人を見事に逮捕するという内容である。大塚評価の「犯人があつぱれ逃げおおせ」という結末に終わる話ももちろん存在しているが、単純にそればかりではなく、『杜騙新書』はその中に多様な世界を描いているのである。

黄霖「晚明短篇世情小説 杜騙新書 版本考」(『文献』2000 年第 3 期)は、“ 杜騙新書 就是一部暴露型的世情小説”(= 『杜騙新書』は暴露型の世情小説である)、つまり『金瓶梅』に代表されるような世情を赤裸々

に描く作品集の一つとして位置付けている。黄霖の論文は『杜騙新書』全体に対する具体的な研究としては、現在ほぼ唯一のものである。

黄霖氏は『杜騙新書』の成立背景として、明代における統治集団の貪欲さ、商人階級の勃興と商品経済の活発化、さらに陽明左派思想の解放的傾向や治安悪化等のその他の要因があると指摘している。中でも注目されるのは2つめ、商人・商業活動との関連性である。黄霖氏は商業とは合法的な詐欺であり、違法な詐欺とは紙一重だと述べ、『杜騙新書』が収める多くの話が商人と関わるのも当然であると指摘している。黄氏は他に『金瓶梅考論』（遼寧人民出版社、1989）といった専門書も手掛けており、様々な角度から論じた金瓶梅との類似性は興味深い。金瓶梅の主人公である西門慶もまた商人であり、物語の展開に商売上の騙しが鍵となる場面が存在する。また言うまでもなく金瓶梅は女性関係とそのトラブルの描写もあるが、『杜騙新書』においても露骨な描写ではないが女性関係にまつわる話が複数ある（但し先述の通り和刻本ではそれらは収録されていない）。

商業経済面だけでなく、中国明代の司法のあり方を描写している点でも『杜騙新書』は興味深い資料である。そして『金瓶梅』やまた『水滸伝』にも犯罪の捜査・判決を担う人物が登場し、物語の展開に大きな影響を与えている。これらの書物で司法界の人々はどうのように描写されているか、賄賂を受け取る汚職に染まった人物なのか、賄賂を受け付けない剛直な人物として描くのか、その性格は其々の書籍によって幾分異なっている。『杜騙新書』についてどうかと言えば、袖の下でいいように動かされる小役人（=吏）はしばしば登場するが、事件の最終的な判決を下す裁判官（=官）の多くは、賄賂を受け付けない剛直で良心的な人物として描かれている。吏には厳しく官に温かい性格を『杜騙新書』は有していると言えるだろう。先述の大塚秀高氏は『疑獄集』といった“宋代に刊行された法家の書”、犯罪事件の捜査・審理に当る者が先人の経験を生かせる参考書としての逸話集の存在を指摘している。正義の上官を登場させ、その捜査と判決手法が描かれている『杜騙新書』にも司法に関る人々に参考書的に読まれていたという可能性もあるのではないかと考えるのである。官吏を理想的な姿で描くのか、それとも汚職役人として露悪的に描くのか、『杜騙新書』『金瓶梅』『水滸伝』またその他にも様々な公案小説が存在しているが、それは中国近代社会に対する人々の見方を様々な形で反映しているのであり、今後更なる詳細な分析が待たれるところである。

伊藤・佐立・氏岡3名は「『杜騙新書』の基礎的研究プロジェクト」として、『杜騙新書』和刻本の現代日本語訳を作成、原文・和

刻本書き下し文・日本語現代語訳文にそれぞれ注を付した。平成27年3月21日、『『杜騙新書』訳注稿初編』を出版、全国の公共図書館並びに東洋学関係出版社に寄贈した。

本プロジェクトはここで一つの区切りを得たが、和刻本に収録されていない『杜騙新書』の別話についても調査研究を進めていく所存である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕(計 1件)

『『杜騙新書』訳注稿初編』
「『杜騙新書』の基礎的研究プロジェクト」
伊藤加奈子・佐立治人・氏岡真土共著
2015年発行、全156頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 加奈子 (ITO, Kanako)
信州大学・学術研究院人文科学系・准教授
研究者番号：80293489

(2) 研究分担者

佐立 治人 (SADATE, Haruhito)
関西大学・法学部・教授
研究者番号：70340643

研究分担者

氏岡 真土 (UJIOKA, Masashi)
信州大学・学術研究院人文科学系・准教授
研究者番号：60303484

(3) 連携研究者

()

研究者番号：